

解説

わたしたちは、1996年10月、紀州鉾山に強制連行された人を訪ねてはじめて江原道麟蹄(インヂェ)に行った。

それから、十数年間、江原道、慶尚北道の各地を訪ね、強制連行された人、家族や同じ村の友人など、数十人から話を聞かせていただいた。ひとりひとりの体験は、植民地にされた国と地域に住む人びとの普遍的なことがらをあらわしていた。

家族が離ればなれ。父や母を知らない子ども。帰らない父を待つ家族。息子を待って死んだ父母。父や息子が日本のどこに連れて行かれたのかわからない。なぜ帰らないのか、わからない。死んだのか、生きているのか。死んだ、と伝え聞いただけ。

そして、それらのことに責任を持つべき侵略国家や侵略企業が、なにもしない。それが、強制連行されて70数年過ぎた2012年現在のことである。

『우리 고향 조선으로부터 기슈광산으로 우리 코ヒャン 朝鮮から 紀州鉾山へ』は、わたしたちがお会いした人たちの体験を、ごくわずかだけ、表現したものである。

朝鮮から紀州鉾山に強制連行された3人の男のものがたり

우리 코ヒャン 朝鮮から 紀州鉾山へ

조선으로부터 기슈광산으로 끌려갔던 남자 세명의 이야기

우리 고향 조선으로부터 기슈광산으로

演劇構成 (52分)

出演

- A、紀州鉾山に強制連行されて死んだ人
- B、紀州鉾山に強制連行されて逃げた人
- C、紀州鉾山に強制連行されて故郷に戻った人
- D、紀州鉾山に強制連行されたAの妻
- E、江原道X郡警察署長(日本人)
- F、朝鮮に労働者を連れに行った石原産業労務係
- G、石原産業紀州鉾山の労務監督
- H、石原産業紀州鉾山の労務監督
- I、石原産業紀州鉾山の軍人

集会参加者の飛び入り参加、歓迎します。掛け声参加、歓迎します。

すべて、紀州鉾山と四日市工場に強制連行された人からの証言で構成しました。